

昭和四十三年

日本思想史関係研究文献要目

凡例

一、本要目には、昭和四十三年に発行乃至発表された日本思想史関係の単行本並びに雑誌・紀要論文を収録した。

一、本要目には、日本思想史関係の学術的な研究を選択収録することを原則としたが、一般読者向けのものも適宜収めた。

一、右のように選択した文献を、Ⅰ単行本目録 Ⅱ雑誌・紀要論文目録の二部に分け、次のように配列した。

ⅠⅡ部とも、文献をその内容によって、総雑・古代・中世・近世・近代に分け、さらにそれぞれに属する思想史関係研究文献を、一般・学問道德教育方面・宗教方面・文芸美術芸能方面・政治社会経済方面・その他 の項目順に分類配列した。

単行本は、書名・著者名・発行所名の順、論文は、題名・執筆者名・掲載雑誌紀要巻号数の順に記載した。

一、本要目の作成には、東北大学文学部日本思想史学研究室所属の助手・大学院学生が協力してあつた。

一、日本思想史という学問の性格上から、研究文献の選択に迷うことが多く、短時日の間に作成したためもあつて、文献の選択や配列に不備の点があるものと考えられる。大方の御教示をお願いする。

I 単行本目録

総 雑

日本文化史概論	石田一良編	吉川弘文館
日本社会の思想史的背景	中野藤吾	明好社
日本封建制イデオロギ―	永田広志	法政大学出版局
日本哲学思想史	〃	〃
日本文化と中国(中国文化叢書10)	尾藤正英編	大修館書店
日本の学問	松島栄一	日本放送出版協会
日本史学史	松本芳夫	慶応通信
日本曆学史	佐藤政次編著	駿河台出版社
日本教育の思想的系譜	小林健三	理想社
日本教育史	唐沢富太郎	誠文堂新光社
―近代以前―	本田義憲	日本放送出版協会
日本人の無常観	石田瑞麿	平楽寺書店
往生の思想	大江淳誠	永田文昌堂
真宗の本願論	西谷啓治編	筑摩書房
禪の古典―日本―	日本宗教史研究会編	法蔵館
布教者と民衆との対話(日本宗教史研究2)	桜井徳太郎	吉川弘文館
神仏交渉史研究	下出積与	〃
―民俗における文化接触の問題―		
神仙思想		

古 代

仏教文学研究 第六集	仏教文学研究会編	法蔵館
隠者の文学	石田吉貞	塙書房
火山列島の思想	益田勝美	筑摩書房
東北キリシタン史	浦川和三郎	巖南堂書店

日本農耕文化の起源	石田英一郎編	角川書店
大学寮と古代儒教	久木幸男	サイマル出版会
―日本古代教育史研究―		
日本書紀研究 第3冊	三品彰英編	塙書房
大江匡房	川口久雄	吉川弘文館
日本の神話	肥後和男	雪華社
初期の仏教(日本の仏教I)	玉城康四郎	筑摩書房
往生伝の研究	古典遺産の会編	新読書社

中 世

日本の開花(大世界史12)	石田一良	文芸春秋社
法然門下の教学	安井広度	法蔵館
親鸞	菊村紀寿	社会思想社
親鸞教義の研究	村上速水	永田文昌堂
親鸞聖人と浄土	大原性実	〃
親鸞とその妻の手紙	石田瑞麿	春秋社
親鸞伝の研究	宮地廓慧	百華苑
正法眼蔵参究	安谷白雲	春秋社

日蓮宗学説史 望月 歆厚 平楽寺書店

日蓮伝説と孟蘭盆 (仏教説話研究第三) 岩本 裕 法蔵館

封建・近代における鎌倉仏教の展開 笠原一男編 //

一向一揆の研究 井上 鋭夫 吉川弘文館

中世の唱導文芸 菊地 良一 塙 書房

近世

近世の庶民文化 高尾 一彦 岩波書店

近世日本の人間尊重思想上・下 高阪正顕編 福村出版

日本町人道 原田伴彦 講談社

日本洋学史の研究 有坂隆道編 創元社

長崎洋学史 古賀十二郎編 長崎文献社

鈴木重胤の研究 谷 省吾 神道史学会

武士道 相良 亨 塙 書房

石田梅岩と「都鄙問答」 石川 謙 岩波書店

本居宣長 田原 嗣郎 講談社

切支丹研究 山田 野里夫 鷺の宮書房

葉隠のこころ 栗原 荒野 金華堂

近代

明治文化研究 第一集 明治文化研究会編 日本評論社

明治維新の精神過程 村上 一郎 春秋社

明治の精神 色川 大吉 筑摩書房

—底辺の視座から—

明治初期の思想 淡野 安太郎 勁草書房

日本における近代化の問題 マリウス・B・ジ ャンセン編 岩波書店

私の昭和思想史 細谷千博編 岩波書店

昭和思想史への証言 大関 将一 理想社

昭和唯物論史(上) 毎日新聞社編 毎日新聞社

戦時下抵抗の記録I 船山 信一 福村出版

—キリスト者・自由主義者の場合— 同志社大学人文 科学研究所編 みすず書房

西洋文化受容の史的研究 佐藤 直助 東京堂出版

フエノロサと明治文化 栗原 信一 文芸書房

吉田 松陰 河上 徹太郎 文芸春秋社

吉田 松陰 池田 論 大和書房

福沢 諭吉 鹿野政直編 清水書院

福沢諭吉のことば 近代思想研究会編 芳賀書店

河上肇の人間像 天野 敬太郎 図書新聞社

近代日本史学史の研究 小沢 栄一 吉川弘文館

—明治編— 唐沢 富太郎 誠文堂新光社

近代日本教育史 鳥 為男 日本教図

明治百年教育史上 その人間 宮坂 広作 法政大学出版局

形成史論 稲富 栄次郎 同文書院

近代以降教育目的の変遷 池田 論 広済堂出版

松 下 村 塾 池田 論 廣島研究所出版会

—近代日本を創った教育— 重久 篤太郎 鹿島研究所出版会

お雇い外国人5(教育・宗教) 牧野 吉吾郎 御茶の水書房

明治期啓蒙教育の研究

大正自由教育の研究

日本百年の宗教

近代日本の法華仏教
—法華経研究Ⅱ—

明治の仏教者(上)

富士門徒の沿革と教義

教祖誕生
—親鸞と中山みきによる—

維新変革期とキリスト教

日本キリスト教神学思想史

日本のキリスト教と神学

日韓キリスト教交渉史

内村鑑三の根本問題

近代日本の宗教と政治

日本の社会思想
—近代化とキリスト教—

日本近代詩とキリスト教

幕末政治思想史研究

近代日本政治思想の諸相

自由と民権の闘い

自由と民権
—明治の群像5—

土佐百年夜話
—民権運動への道—

革命伝説Ⅰ(大逆事件の人びと)

大正デモクラシーの社会的形成

日本の反逆思想
—無政府主義運動小史—

中野 光 黎明書房

村上 重良 講談社

望月 歆厚編 平楽寺書店

常光 浩然 春秋社

松本 佐一郎 大成出版社

笠原 一男 日本経済新聞社

海老沢 有道 新生社

熊野 義孝 新教出版社

佐藤 敏夫 日本基督教団出版局

呉 允台 新教出版社

山本 泰次郎 教文館

中 濃 教 篤 アポロン社

隅 谷 三喜男 東京大学出版会

佐藤 泰正 新教出版社

山口 宗之 隣人社

橋川 文三 未来社

毎日新聞社編 毎日新聞社

見田 宗介編 三一書房

高知新聞編 浪速社

神崎 清 芳賀書店

金原 左門 青木書店

秋山 清 現代思潮社

大杉栄研究

ナショナリズム
—その神話と論理—

日本外交思想史論考 第二

近代日本社会思想史 I

講座日本社会思想史 6

大沢 正道

橋川 文三

稲生 典太郎

古田 啓一編

住谷悦治他編

同成社

紀伊国屋書店

小峰書店

有斐閣

芳賀書店

II 雑誌・紀要論文目録

総 雑

日本文化について

日本文化の可能性(講演)

日本人の国民性

国民文化の形成をめぐって

日本の思想風土(座談会)

日本の風土と文化的社会的精神
—日本民族の心覚書—

日本文化小史 19—
「衆人愛敬」

日本文化小史 20—
—小京都の成立—上—

日本文化と西洋文化の異質性

日中文化の交流

西谷 啓治

石田 英一郎

依田 明

森谷 尠久

高山岩男他

高山 岩男

村井 康彦

須田 豊太郎

森 克己

国学院大学日本文化研究所紀要 二一

自由 一〇—七

比較文化 一四

芸能史研究 二二

心 二一—八

心 二一—一

日本美術工芸 三五二

日本美術工芸 三五三

専修人文論集 一

月刊文化財 六二

文化史における地方文化の問題

伊東多三郎

日本歴史二四八

郷土玩具から見た日本人の心

潮田鉄雄

民族学研究 三二—三

日本人の思考と述語様式

大野晋

文学 三六—二

日本人が求めた人間像

伏見猛弥

玉川大学文学部紀要 八

「見立て」の民族倫理

西田長男

国学院雑誌 六九—一一

義理観念の一背景

久保田勉

甲南女子大学研究紀要 四

葬法と文化

久野昭

亜細亜大学教養部紀要 二

日本のシャーマニズム

堀一郎

世界 二七—二

超越なるもの

田中元

理想 四二—一

日本における信教の自由

藤谷俊雄

日本史研究 一〇〇

神道の形成(前編)

堀哲

中京大学論叢五

神道について(下)

肥後和男

神道学 五六

裁判の神としての直毘・禍津日の二神

西田長男

国学院法学 五一—二

山の神・田の神考

山口弥一郎

亜細亜大学教養部紀要 三

甲斐の神道

深山忠六

神道学 五六

日本陰陽道のある習合形態

岩佐貫三

印度学仏教学研究 一七—一

台湾人の民間信仰と我が神道及び陰陽道

滝川政次郎

国学院大学日本文化研究所紀要 二二

日本における仏教思想の受容

三枝充憲

心 二一—四

仏教受容の諸形態に関する研究について

宮本正尊

同朋学報 一七

日本の宗教

中谷弘光

愛知県立大学文学部論集 一八

日本の慈善救済における仏教受容の一特質について

守屋茂

印度学仏教学研究 一六—一

日本唯識における我の問題

太田久紀

〃

日本唯識の一乗化

山崎慶輝

仏教学研究二二

仏陀相好観の日本の変容

門川徹真

仏教学研究二四

日本仏教文学の概念と範疇

山田昭全

国文学踏査 八

経典と仏像のあいだ

佐和隆研

仏教芸術 六九

中国美術の受容に際しての日本人の好み

佐藤雅彦

哲学(三田哲学会) 五三

アジア史の中の天皇制

佐竹靖彦

岡山史学 二二

日本の家と家族

喜多野清彦

思想 五二—七

丸山思想史学の批判的再評価

田中明

三田学会雑誌 六〇—一二

宗教研究における人類学的アプローチの視座

藤井正雄

大正大学研究紀要 五二

哲学の発想序説

高橋英夫

中央公論 八三—二

尾形裕康博士著「我国における千字文の教育史的研究」

多賀秋五郎

早稲田大学史紀要 二—二

文学論における文化史的考察

堀哲

中京大学文学部紀要 二—一

シンポジウム・東洋における支配者像と支配の論理 橋本政良他 史学研究一〇三

日本宗教史研究会編「日本宗教史研究Ⅰ 組織と伝道」 大橋俊雄 日本歴史二三八

家永三郎監修「日本仏教史Ⅰ 古代編」 伊藤唯真 仏教史学 一四―二

大原先生古稀記念「浄土教思想研究」 萩原弘機 真宗学 三八

西田正好著「仏教と文学」 国東文麿 国文学研究 (早大) 三八

古 代

日本の古代文化をめぐって 田中一松、蔵原惟人 (対談) 文化評論 八五

白鳳文化をめぐって 徳光久也 信州大学教育学部紀要 一七

平安初期における文化の地方普及について 中山薫 岡山史学 一八

服飾史を中心にみた外来文化の日本化 鳥羽正昭 中京大学論叢四

―王朝文化の成立―

日本書紀私記甲本の研究 粕谷興紀 芸林 一九―二

上代本紀について 鎌田純一 皇学館大学紀要六

日本紀略の原拠について (二) 柳宏吉 続日本紀研究 一六・二完合

三代実録とその撰者 坂本太郎 国学院大学日本文化研究所紀要三

三教指帰における孝思想 今井奉一 密教文化 八二

源氏物語の倫理思想―――「物のあわれ」を中心として―― 重松信弘 国文学研究 (梅光女学院大) 三

空海教育その実践面と現代的意義 吉川正二 甲南女子大学研究紀要 四

「金光明経」の受用と飛鳥仏教 田村円澄 史淵 九八

聖徳太子論考 長沼賢海 〃 一〇〇

聖徳太子の浄土観について 奈良弘元 印度学仏教学研究 一七一―

聖徳太子における聖的自覚と福祉理念 早坂博 東北福祉大学論叢 七

聖徳太子とアシヨカ王の仏教 坂東性純 大谷学報 二

三経義疏の真撰論・偽撰論についての疑義 大野達之助 日本歴史二四一

思想的に見た「法華義疏」の一特徴 望月一憲 印度学仏教学研究 一六一―

勝鬘経義疏における生死の問題 金治勇 〃 〃

勝鬘経義疏の一特徴 望月一憲 〃 一七一―

―真撰について― 金治勇 〃 〃

勝鬘経義疏における如来蔵思想 金治勇 〃 〃

明一撰「聖徳太子伝」(明一伝)の逸文 飯田瑞穂 中央大学文学部紀要 四九

―奈良時代末期の一太子伝の検討― 堅田修 大谷大学研究年報 一八

―特に奈良時代の藤原氏について― 那波利貞 甲南大学文学会論集 三八

鑑金真大和上と其の時代 杉山二郎 古美術 二一

聖武天皇と大仏造立(特集・大仏建立) 石田瑞磨 南都仏教 二一

鑑真における布薩の意義

―日本仏教史の一問題―

鑑真和上の戒律思想背景
—菩薩戒小論—

土橋秀高

東方宗教 三一

大乘菩薩戒と社会福祉
—鑑真の社会教化—

道端良秀

仏教史学 四一—

平安時代初期の仏教

二葉憲香

歴史教育 一六—九

日本天台における伝戒護国の思想

竹田暢典

大正大学研究紀要 五二

上古日本天台における本覚法門展開上の限界

浅井圓道

印度学仏教学研究 一六一—一

伝教大師の菩薩觀

小寺文顯

〃 一六一—二

最澄の円密一致、顯密(権実)差別の思想

勝又俊教

大正大学研究紀要 五二

「法華驗記」にみる日本神祇とその関連者
—最澄の場合—

鈴木治美

印度学仏教学研究 一六一—一

伝教大師最澄の禪法相承について
—「天台法華宗伝法偈」を中心として—

牛場真玄

〃 一七一—一

伝教大師の密教相承と不空三蔵

木内央

〃 〃

「末法燈明記」について

和田悌一

精神科学 七

弘法大師法考 一—四—

高見寛恭

密教学 五

空海の戒と付法について

高木諄元

密教文化 八二

声字実相義にみられる空海の宗教

小野塚幾澄

大正大学研究紀要 五二

—法身説法について—

弘法大師の真言教義と教育

別所千賀照

亜細亜大学教養部紀要 一

弘法大師教学形成の背景

小野塚幾澄

大正大学研究紀要 五四

—弘法大師の著作にみられる引用仏典について—

秘蔵宝輪講話 一—一—

田中千秋

密教文化 八五

仁和寺濟暹僧都の教学
—高野山教学展開の一として—

大山公淳

密教学 五

東寺講堂の諸尊とその密教的意義

高田修

美術研究 二五三

説話の受容の一例について
—永観の往生捨因の場合—

中野猛

国文学論考 四

恵心僧都と四明知礼
—上—
—趙宋期における日中天台の交流—

安藤俊雄

仏教学セミナー

新出の源信記「菩提心義要文」の研究

佐藤哲英

竜谷大学仏教文化研究所紀要 七

往生要集の成立背景

普賢晃寿

真宗学 三八

浄土教の普及と阿弥陀堂

田沢坦

月刊文化財 五六

古代東国における観音像の造立法華滅罪寺中興聖恵房慈善

菅原征子

仏教史学 三—四

古代における齋戒の觀念と構造

岡田重精

日本仏教 二八

日本民族の宗教観試論
—古事記・日本書紀—

穴山孝道

皇学館大学紀要 六

神と死と祖先神

D・M・ブラウン

文学論輯 一五

先祖と氏神

有賀喜左衛門

国学院大学日本文化研究所 二—

記紀載録神話に於ける生と死の起源説 明神話

福島秋穂

民族学研究 三二—三

神祇官の祭儀
—祈年・月次・新嘗—

西角井正慶

国文学研究(早大) 三八

火の神の伝承
—鎮火祭の祝詞を中心に—

青木紀元

国学院大学日本文化研究所紀要 三

三輪山崇拜についての覚書

石崎正雄

福井大学教育学部紀要(人文学部) 一七

熊野三宮信仰と記紀神話

鶴殿正元

やまと文化 四七

国学院雑誌 六九—一一

記紀・風土記の成立に関する
覚書
川副武胤 神道学 五九

古事記の成立
―序文の解釈をめぐって―
三谷 栄一 国文学解釈と鑑賞 三三―三七

古事記の原資料をめぐって
(座談会)
神田秀夫、三谷 栄一、西田長男 国学院雑誌 六九―七一

古事記再発見への前提
梅沢 伊勢三 文芸研究 六〇

八岐大蛇神話への一考察
加藤 義成 神道学 五六

出雲と筑紫
―神話伝承における類似性―
酒井 将 国文学論叢 一四

古事記国作・国譲考
―神々の物語―
川副武胤 史学雑誌 七二―七〇

古事記天孫降臨の条に於ける
一問題
毛利正守 皇学館論叢 一三

記紀の神話における猿田彦神
井毛 至 人文研究(大阪 市大) 一九―一九

スクナヒコナノ神
―神統譜から締め出された神―
吉井 巖 万葉 六八

少彦名神についての覚書
阪下 圭八 歴史学研究 三五

古事記における「御祖」と
「祖」について
毛利正守 芸林 一九―一

「理」の文学
―古事記本質の一考察―
藤井 信男 駒沢国文 六

万葉集相聞歌における愛の発
想について
久保田 晴次 国文学攷 四五

日本霊異記覚書
―「みる」ことを中心にしての試論―³
神田 秀夫 成蹊国文 一

文人菅原道真論
青木 香代子 女子大國文 五〇

平安時代漢詩人の規範意識
―本朝文粹所載の大江匡衡と紀齊名の
省試論争をめぐって―
金原 理 語文研究 二五

白氏文集の影響について
神田 秀夫 金沢文庫研究 一四―一

紫式部の人間観と文芸観
仲田 庸幸 愛媛大学紀要 (人文科学) 三A

歌道における俊恵の歩みとそ
の到達点とについて
岩崎 礼太郎 国文学攷 四五

―歌論との関連において―
創作意識から見た王朝和歌の
一特質
橋本 不美男 文学 三六一―一

―枕草子を中心にして―
源俊賴評伝より
関根 慶子 金沢文庫研究 一四―二

―その不遇意識をめぐって―
文学に描かれたる怨霊の素地
鈴木 佐内 国文学踏査 八

―六所神の成立―
性霊集に見られる弘法大師の
書論
松崎 恵水 大正大学研究紀 要 五二

日本の神話について
蒲生 耕造 文化評論 八五

建国神話の虚構性
―とくに天孫降臨説話における神宝をめぐって―
直木 孝次郎 歴史学研究 三五

「建国神話の虚構性」補正
上田 正昭 // 三三七

記紀神話論の再検討
梅沢 伊勢三 // 三三五

神話の形成
―民俗神話から国家神話完成までの跡づけ―
桜井 光堂 国文学解釈と鑑賞 三三―三七

日本古代国家連合の領土規定
―記紀の法律学的研究と解説法の発見―
藤田 清 法学論集 (駒沢大) 四

憲法十七条の聖徳太子親撰に
関する研究
橋本 政良 印度学仏教学研究 一七一―一

律令制天皇の基本性格
佐々木 昌雄 史学研究 一〇三

山上憶良試論
文芸研究 五九

山上億良に関する一考察
—政治意識とその成立をめくつて—
木戸季市 文化史学 二二

「神祇官」の成立についての
一考察
坂本勝成 神道学 五七

文徳天皇朝成立期における神
祇行政
—諸神同時昇叙を中心に—
熊谷保孝 歴史教育 一六一九

神階勲位の基礎的研究
—上・下—
渡辺直彦 神道学 五七・五八

大陸法継受前における法規範
—氏族的不文固有時代—
佐々木高明 史 峯 四

今鏡の世界
—今鏡の政治意識の所在とその解明—
加納重文 国語国文学 一六

常世の国
—日本的ニートピアの原像—
安永寿延 文学 三六一二

わがくに古人の言語と音声に
関する思想
佐藤良雄 武蔵野女子大学
紀要 三

上代人の正字意識について
—付萬葉集か万葉集か—
鈴木一男 国語と国文学 四五—一一

三山歌
—古典の文化人類学的考察—
布村一夫 日本文学 一七一三

日本後紀、続日本後紀と讖緯
思想
平秀道 竜谷大学論集 三三三

中古物語の自然観
—伊勢物語を中心に—
中田武司 専修人文論集 一

平安後期における延喜時代観
所 古代学 一四—二

古代末期における価値観の変
動
大隅和雄 北海道大学文学
部紀要 一六一—一

記紀神話研究の現状と課題
岡田精司 歴史学研究 三三

吉井巖氏著「天皇の系譜と神
話」
大久保正 万葉 六八

川副武胤著「古事記の研究」
金井清一 国語と国文学 四五—一二

西郷信綱著「古事記の世界」
青木保 文学 三六一九

西郷信綱「古事記の世界」
安永寿延 日本文学 七一—一

重松信弘著「源氏物語の仏教
思想」
原田隆吉 文芸研究 五九

中世

日本中世文化の世界史的意味
梅原猛 国文学 一三—七

北山文化と東山文化
関忠夫 月刊文化財 五二

中世文芸のころ
木藤才藏 国文学 一三—七

中世における日本書紀の伝来
久保田収 芸林 一九—四

吾妻鏡と鶴岡社務記録との関係
伴五十嗣郎 〃 〃

北条実時の修学と精神
阿部隆一 金沢文庫研究 一四—六

神皇正統記の成立過程の研究
平田俊春 防衛大学校紀要 一六

神皇正統記の延元四年初稿本
〃 〃 〃

堪囊鈔と中世説話集
—付、三國伝記成立年代考への資料提起—
今野達 歴史教育 二五—二

日本のモラリスト
—とくに中世の隠遁的文人鴨長明をめくつて—
広田繁 専修国文 四

真宗の倫理について
—特に法然、親鸞を中心として—
三木照国 倫理学年報 一七

中世人にみる生と死

大野 順一 国文学一三一七

中世人と無常

伊藤 博之

〃〃

無常 観

渡辺 貞磨

大谷大学研究年報一九

—平家物語の心—

触穢思想の中世的展開

横井 清

風俗 七—三

法然教学における心について

白井 元成

大谷学報 四七—四

法然仏教における釈尊

光地 英学

駒沢大学仏教学部研究紀要二六

法然における三身の問題

高橋 弘次

印度学仏教学研究 一六—二

—特に三身にまつわる二つの立場について—

法然浄土教と「教行信証」

普賢 晃寿

童谷大学論集 三八七

法然の善人意識から親鸞の悪人意識

河田 光夫

日本文学 一七—三

—伊藤氏の論「本誌一六卷一—号所載「中世的人間観の成立—親鸞の思想をめぐって」」に対する問題提起

源空聖人私日記考

福井 康順

印度学仏教学研究 一六—一

「唯信抄」について

松野 純孝

日本仏教 二八

唯信鈔文意における伝統と己証

浅野 教信

童谷大学論集 三八四

真宗教団の中世の変貌

北西 弘

大谷学報 一—

—「知識」と伝道の問題をめぐって—

真宗教系論序説

藤原 凌雪

童谷大学仏教文化研究所紀要七

—教理と実践の立場から—

真宗教学の主体性の問題

桐溪 順忍

童谷教学 二

—真宗学方法論の一駒—

真宗に於ける他力教義の根拠

中村 向西

〃〃

真宗行論の一考察

能美 直哉

真宗学 三八

—五念門と五正行—

現世利益和讃について

小林 昭英

童谷教学 三

親鸞の理解について

幸 日出男

基督教学研究 三五—二・三

親鸞聖人の宿業思想と仏教のそれとの同異

宮地 廓慧

印度学仏教学研究 一六—一

親鸞聖人における信心正因の意義

梯 実円

童谷教学 三

親鸞聖人における〃不体失往生〃の意味

宮地 廓慧

印度学仏教学研究 一七—一

親鸞の「往生」の思想—1—

上田 義文

親鸞教学 一三

親鸞の「往生」の思想

〃〃

同朋学報 六・元

鎌倉仏教を背景とする親鸞の信についての問題

石田 充之

印度学仏教学研究 一七—一

親鸞聖人と太子信仰

小島 叡成

〃〃 一六—一

親鸞聖人と聖徳太子

長安 章俊

真宗研究 一三

—七十五首和讃—製作の契機について

柏原 祐泉

親鸞教学 一二

愚禿親鸞の名に寄せて

小野 正康

印度学仏教学研究 一六—一

親鸞「教行信証」証卷の主要問題についての日本学的構想

〃〃

〃〃 一七—一

親鸞『教行信証』「真仏土巻」の主要問題についての日本学的構想

武内 義範

親鸞教学 一二

宗教的行為としての「大行」

〃〃

甲南大学文学会論集 三八

歎異抄の研究

植野 光悟

国文学一三一七

歎異抄

杉浦 明平

大谷学報 一—

歎異抄の性格

広瀬 杲

親鸞教学 一二

歎異抄における非情の側面

稲葉 秀賢

文学科論集 (鹿兒島大) 三

信仰の論理

菅原 顕敬

〃〃

—歎異抄を素材として—

親鸞聖人御筆「二尊大悲本懷」
について
——経釈要文——
福原亮 巖
竜谷教学 四七—四

浄光寺本「親鸞聖人御消息」と「末燈鈔」
〔附浄光寺本「親鸞聖人御消息」翻刻〕
多屋頼俊
大谷学報 二

「摧邪輪」と親鸞教学との対応
——信の問題を中心として——
嬰木義彦
真宗学 三八

存覚師の出世本懐説について
藤原教円
竜谷教学 三

曹洞禅における威儀の伝統について
渡辺勝人
宗学研究 一〇

日本哲学史における道元の地位
——「正法眼蔵」の哲学批判のこころみ——
戸頃重基
金沢大学法文学部論集
(哲学篇) 一五

道元禅における菩提心の実践的性格
——非思量に関連して——
原田弘道
宗学研究 一〇

道元禅師会下における義介禅師の地位について
松田文雄
〃 〃

道元禅の構造と本質
——「禅・実存・日本文化（道元と世阿彌・芭蕉及びハイデッガー）」——
杉尾守
山口大学教育学部研究論叢
(第一部) 一七

道元の「仏性」とシェリングの「絶対者」
——比較哲学的研究——
笠井貞
印度学仏教学研究 一七—一

道元の「心」とバークリの「心」
——比較哲学的研究——
〃
〃 一六—二

道元と親鸞における悪人問題
岩本泰汲
〃 一七—一

『正法眼蔵抄』 「諸悪莫作」の帖について
菊地良一
宗学研究 一〇

正法眼蔵坐禅箴について
木下純一
〃 〃

正法眼蔵有時考
増田長世
福岡教育大学紀要(社会科学編) 七

——時間論のための試論——

正法眼蔵における心の研究
——三界唯心の巻について——
竹村仁秀
宗学研究 一〇

正法眼蔵の行持観
笠井貞
倫理学研究 一六

寂円の家風とその特色
東隆真
印度学仏教学研究 一七—一

瑩山禅師の禅風について
——(宗教思想史研究序説—1—)
——特に密教的要素の尊入と檀越について——
山端昭道
宗教研究 一〇

「諸回向清規」所収の得度儀規と「永平祖師得度略作法」について
渡部賢宗
〃 〃

中世会津領の禅宗諸派とその檀越
葉貫磨哉
駒沢史学 一五

日蓮聖人に於ける仏使の自覚
上田本昌
印度学仏教学研究 一七—一

時衆教団の成立
石田善人
史林 五一—一

初期時衆教団の動向
大橋俊雄
仏教史学 二四—二

——特に「一遍聖絵」「一遍上人絵詞伝」の成立を中心として——
時衆二祖の教学 | 4・5 |
河野憲善
印度学仏教学研究 二六—二七—

中世歌謡研究と時衆和讃
金井清光
日本歌謡研究 六

時衆と葬送儀礼
大橋俊雄
印度学仏教学研究 一六—一

——特に靈山としての藤沢道場清浄光寺について——
鎌倉時代における法相教学の諸問題
勝又俊教
〃 一六—二

明恵上人「四座講式」
——想仏恋の文学——
榎克朗
大阪教育大学紀要(人文科学) 三

選択集に対する摧邪輪の反論と門下の展開
——善提心について——
紅楦英顕
竜谷大学仏教文化研究所紀要 七

中世律僧の活動
永島福太郎
日本歴史 二四八

日本中世思潮と天台本覚思想 田村芳朗 印度学仏教学研究 一六一—二

宇治拾遺物語における叡山仏教 渡辺守順 〃 一六一—一 大正大学研究紀要 五三

中世東寺教学の伝統 榎田良洪 日本歴史二四一

鎌倉時代の太子信仰 木下幹弥 史迹と美術 一

四天王信仰の東漸と四天王寺 藪田嘉一郎 金沢文庫 一四—二

浄光明寺草創期から南北朝時代にかけての世代とその教学 大三輪龍彦 立正史学 三〇

中世的寺社権力の否定過程について 坂本勝成 印度学仏教学研究 一六一—一

末法における仏罰の法民俗 荒井貢次郎 国学院法学 五—三

日本中世武家法起請文の場合 小林宏 国学院雑誌 六九—一一

中世伊達氏の信仰とその社寺法 安津素彦 日本仏教 二八

本地垂迹説成立前期の神仏關係私考 清田義英 印度学仏教学研究 一六一—一

僧団議決法の一こま 〃 史観 七七

中世僧侶集会に於ける議決方法について 〃 印度学仏教学研究 一七一—一

中世寺院集会における議決方法 〃 中京大学文学部紀要 二—一

中世寺院集会における不参者の罪科規定について 〃 女子大國文四八

晩年の鳥羽院について 浅井峯治 国文学言語と文芸 一〇—三

歌僧慈円小考 藤本倫子 国文学言語と文芸 一〇—三

西行の和歌と仏教 萩原昌好 国文学言語と文芸 一〇—三

中世文学における超現実的性格 木藤才藏 国語と国文学 四五—三

定家の歌論とその実践 松原多仁子 和歌文学研究 三

続後撰和歌集の撰集意識 伊藤恒雄 国文学言語と文芸 一〇—三

頼阿の歌論 稲田繁夫 人文科学研究報告(長崎大) 一七

「方丈記」不請の阿弥陀仏について 森下敏行 国文学論叢 一四

日蓮説話の系譜 石上善応 大正大学研究紀要 五四

花園上皇の思想と文学 次田香澄 二松学舎大学論集 昭四二年度

つれづれ草と摩訶止観 鈴木久 国文学言語と文芸 一〇—四

能の呪術と文芸と 石上堅 国学院雑誌 六—二

謡曲詞章における無常美 前田妙子 日本文芸研究 一九—二

世阿弥と人間探求 新開長英 九州産業大学教養部紀要 四—二

「山雲海月」と世阿弥 田島柏堂 宗学研究 一〇

二条良基における幽玄の世界 実方清 日本文芸研究 一九—一・二

仏教と連歌文芸 石原清志 竜谷大学仏教文化研究所紀要 七

特に心敬の連歌について 稲田利徳 国語と国文学 四五—八

正徹と心敬 稲田利徳 新潟大学教育學部長岡分校研究紀要 一二

連歌の表現性について 押見虎三三 表現時代史的研究への試み

表現時代史的研究への試み

表現時代史的研究への試み

表現時代史的研究への試み

応永の連歌論書
—連通抄について—
鳥津 忠天
連歌俳諧研究 三

連歌理論に関する研究二篇
—「古今連歌集論」の意味論的考察、宗
—「古今連歌集論」の意味論的考察、宗
—祇の連歌観をめぐる問題—
丸山 嘉信
徳島大学教養部
紀要(人文社会科学)
三

十三世紀後半における南都興
律とその建築活動
—新和様建築の形式に関する試論—
永井 規男
仏教芸術 六八

時宗の絵巻
宮 次男
日本美術工芸

北山時代美意識の二重構造論
吉村 貞司
武蔵野女子大学
紀要 三

詩と信仰と現実と
—慈円における宗教と国家—
梶 村 昇
亜細亜大学教養
部紀要 三

藤原兼実について—上・中—
多賀 宗隼
日本歴史
二四六・二四七

一向一揆の意識構造
—教団の group effect を中心として—
北 西 弘
大谷大学研究年
報 二〇

「下剋上」の論理
福 尾 猛市郎
日本歴史二四九

神皇正統記に見る北畠親房の
政治思想
高 橋 公義
文化史研究二〇

後醍醐天皇の興禅護国
中 村 直 勝
史迹と美術 六

赤松俊秀監修「日本仏教史II
中世篇」
玉 山 成 元
仏教史学二四—二

金井清光著「時衆文芸研究」
岡 見 正 雄
国語と国文学
四五—九

安西覚承著「念仏上人伝」
梅 辻 昭 音
浄土宗学研究二

加藤仏眼著「教行信証監徹」
亘 一 弘
真宗学 三八

宮地廓慧著「親鸞伝の研究」
田 中 久 夫
日本歴史二四八

井上鋭夫「一向一揆の研究」
紙 谷 寿 恵 子
〃 二四七

桜井好朗著「隠者の風貌」
杉 本 圭 三 郎
文学 三六—五

桜井好朗著「隠者の風貌」
伊 藤 博 之
日本文学二七—四

近 世

南蛮文化の伝来について
岡 本 良 知
東洋学報 五—二

幕藩制の確立と武家文化
関 忠 夫
月刊文化財 五六

江戸時代における三都の文化
今 中 寛 司
文化史研究二〇
日本美術工芸
三五—三

特集・鉄砲文化史
鉄砲文化論
森 谷 尅 久
〃

近世思想史の諸問題
衣 笠 安 喜
立命館文学 二七

徳川時代における合理的思惟
の発展 | 1・2・3 |
源 了 円
心 二一—一〇

近世文芸の宗教的史観 | 3 |
村 田 昇
国文学研究(梅
光大学院大) 三

近世封建意識の崩壊 | 1 |
〃
〃

中世から近代への進向
〃
〃

近世儒者考
—阿波における—
沖 野 舜 二
徳島大学学芸紀
要(社会科学) 七

近世邦儒の中庸の解釈と中庸
欄外書
田 中 佩 刀
明治大学教養論
集 三三

江戸時代における尊孟非孟の
論争について
河 村 義 昌
都留文科大学研
究紀要 五

徳川義直の学問振興
田 辺 裕
芸林 一九—三

家忠日記の原本について

岩沢 愿彦

東京大学史料編纂所報 二

徳川実紀の編纂

福井 保

書誌学 一〇

寛政重修諸家譜の副本
日光東照宮に納めた時期

片山 勝

日本歴史二三八

醇儒安東省菴

山室 三良

九州文化史研究 所紀要 一三

前期水戸学者の一考察
三宅観瀾と栗山潜鋒

大月 明

人文研究(大阪市大)一九一八

崎門学の社会的性格

衣笠 安喜

立命館文学 三三

貝原益軒の養生観の特質

汲田 克夫

思想 五二八

蕃山の学の自然的性格

牛尾 春夫

哲学 二〇

熊沢伯継事蹟考

〃

広島大学教育学部紀要(第一部)云

熊沢蕃山の教育思想

〃

〃(第一部)〃

省察から事功へ
中江藤樹と熊沢蕃山

〃

〃(第二部)〃

伊藤仁斎における学問と実践

尾藤 正英

思想 五二四

古義学的方法の成立
伊藤仁斎「中庸發揮」の諸稿本をめぐって

野口 武彦

文学 三七八・九

徂徠の人生論と経済思想

大久保 達正

経済論集(大東文化大)一一

徂徠と葉水心との間
島田虔次氏の「朱子学と陽明学」にこたえて

今中 寛司

人文学 一〇〇

近世後期の朱子学と水戸学との関係
支配の論理をめぐって

頼 祺一

史学研究一〇三

本多利明の経済思想小論
特に重商主義論を中心として

平田 厚志

龍谷史壇 五九

橋本左内の学術と思想

山崎 道夫

東洋研究 一七

塩谷岩陰の事蹟について

塩谷 桓

斯文 五一

岩陰先生と山形

平沢 東貫

〃

広瀬淡窓と高野長英

松月 秀雄

教育学雑誌 二

広瀬淡窓とその思想

井上 源吾

東洋文化 一七

広瀬淡窓の老子観
人間性研究の一環として(三)

大久保 勇市

芸文 九一二

曾我耐軒おぼえ書
士人の道徳考断草

塚本 学

信濃 二〇一

江戸後期の知識人(一・二・三)
頼山陽を中心として

中村 真一郎

文学界 三一〇・二・三

吉田松陰(一八・一九完)
武と儒による人間像

河上 徹太郎

〃二二一三・四

日本のコミュニシンの原理
安藤昌益の社会思想

安永 寿延

思想 五三三

二宮尊徳の経済学考

片山 巍

国士館大学政経論叢 六

尊徳と墨翟
其の思想的関連性について

矢野 春隆

桜美林大学中国文学論叢 一

国学の再建

重松 信弘

神道学 五八

国学と和学と古学

藤井 貞文

国学院雑誌 六九一・一

教育力としての国学

小林 健三

神道史研究 一六十三

国学思想の萌芽
小笠原定世とその門人

菊川 兼男

兵庫史学 五〇

江戸派の国学序説
その性格と学史上の定位

内野 吾郎

国学院雑誌 六九一・二

国学における生命思想論序説
本居宣長を中心に

高田 衛

文学 三六一・二

国意考とその論争について

小笠原 春夫

国学院大学日本文化研究所紀要三

「国意考」ノート	長尾龍一	社会科学紀要二七
和訓葉成立私考 —土清と真淵との関連—	北岡四良	皇学館大学紀要六
本居宣長の古語研究の理念と方法	重松信弘	皇学館論叢 一—四
本居宣長における規範・法則の問題と学問展開の方向	田原嗣郎	思想 五三一
本居宣長の遺言について —遺言書にあらわれた宣長の思想と心理—	松本滋	宗教研究 四—二
本居宣長の神道説について	城福勇	香川大学教育学部研究報告 (第一部) 二三
本居宣長の上代文学観 —玉勝間を中心として—	久松潜一	国学院雑誌 六九—一一
本居宣長の物の考え方について	〃	月刊文化財六〇
本居宣長—一六・一七・一八—	小林秀雄	新潮 三三・五七 九二、 癸—一
本居宣長覚書	山本健吉	文学 三六—八
宣長「もののはれ」論の構造序説	小椋嶺一	国文学論叢 一四
物に行く道	西郷信綱	文学 三六—八
安藤昌益と本居宣長	尾藤正英	〃
宣長と秋成 —「月の神」論争再説ノート—	高田衛	〃
「古事記伝」のために	吉川幸次郎	〃
雅と俗	杉浦明平	〃
平田篤胤の道家傾倒と附会説	三木正太郎	芸林 一九—五
平田篤胤の鈴屋入門の時期について	〃	皇学館論叢 一—四
平田篤胤と神仙思想	〃	神道史研究 一六—三

平田篤胤の仏教研究	三木正太郎	皇学館大学紀要六
橘守部に就いて その国学上の立場と思想—	小笠原春夫	国学院雑誌 六九—七
鶴峯戊申の「究理学」と「開国論」	藤原暹	日本思想史研究 二
鈴木重胤の「こころの掟」 —国学者の家庭祭祀の一例—	谷省吾	皇学館論叢 一—五
わが国近世のヨーロッパ科学受容についての一考察 —所謂「みやこのアカデミア」について—	尾原悟	上智史学 一—三
源内の書翰二通	城福勇	日本歴史二四六
高松藩の「仕官御講」に対する平賀源内の姿勢について	〃	香川大学教育学部研究報告 (第一部) 二四
渡辺崋山の狂歌 —儒教による洞察が拓いた地平—	久曾神昇	愛知大学総合郷土研究所紀要 三
渡辺崋山 —一人とその教育思想について—	市井三郎	展望 一—四
渡辺崋山 —人とその教育思想について—	安藤五郎	教育学研究 三—二
高野長英の脱獄	南和男	日本歴史二四四
大槻玄沢に関する二、三の考察	杉本つとむ	早稲田大学図書館紀要 九
馬場貞由の和蘭文の書翰について	沼田次郎	日本歴史二四一
泊園書院と適塾 —幕末における大阪の学問—	浅井允晶	歴史と神戸三一
青地林宗と津軽藩	宮崎道生	日本歴史二四六
幸運児ジョン万次郎	川合彦充	社会思想研究 二〇—二
佐賀支藩の蘭学について —小城藩の場合—	杉本勲	史淵 一〇〇

江戸前期数学史の研究 —特に沢口一之を中心として—	高田奉子	駒沢史学 一五	豪商升屋平右衛門山片重芳の蔵書・収集品について —下—	有坂隆道	史泉三五・三六
「阿蘭陀通詞」の語学学習について(上) —洋学教育史研究のために—	田中克佳	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 八	近世商家家法における徳目の構造 —「家業」経営体の価値体系と人間形成—	入江宏	人文論究(函館人文学会) 二八
「舍密開宗」における化学親和力の観念 —二—	坂口正男	科学史研究 八三	近世の世俗主義と仏教	柴田実	仏教史学 四一
「舍密開宗」における化学命名法	〃	〃 八五	戦国武将北条氏綱の信仰	岡田実	国学院雑誌 上
「洋外通覧」と蕃史について	矢島玄亮	書誌学 一一	北条氏と諏訪神社 —得宗専制と御射山祭—	金井典美	金沢文庫研究 一四一—一〇・二
桂川甫周の世界図について	海野一隆	人文地理 三—四	近世浄土宗発展の基礎	玉山成元	印度学仏教学研究 一六一—一
鎖国時代における長崎を中心とする英学事情ならびに交易事情への一考察	原田二郎	名城商学 一八一	近世初期における浄土宗政治 —とくに関東を中心として—	〃	〃 一七一—
医術と秘方	緒方富雄	日本歴史 二三六	戦国期関東浄土教団の地域展開 —下総相模を中心として—	長谷川匡俊	淑徳大学紀要 二
甲陽軍鑑論	有馬成甫	軍事史学 一一	本願寺教団の東西分立 —教如教団の形成について—	柏原祐泉	大谷大学研究年報 一八
「甲陽軍鑑」の史料価値	奥野高広	日本歴史 二四〇	東本願寺翻訳局目録に見える「耶蘇伝」について	岩見至	大谷学報 四七—三
義理意識成立の場について	久保田勉	哲学(広島哲学会) 二〇	徳本行者について	戸松啓真	大正大学研究紀要 五二
近世農民倫理の形成 —近世前期先進地域農村本百姓相互間の場合—上・下—	布川清司	思想 五三・五三	幕末の薩摩門徒と本願寺	福間光超	真宗研究 一三
「葉隠」試論	佐々木雄爾	長崎造船大学研究報告(人文社会科学編) 八	寺檀制度の成立過程 —下—	大桑齊	日本歴史 二四三
「海国兵談」が「武備志」より受けし影響について	太田弘毅	歴史教育 一六一—三	近世後期「日蓮上人伝」の出版について	冠賢一	印度学仏教学研究 一六一—二
頼山陽の書教育(二) —その書簡による再論—	冠豊一	書品 一八八	「妙好人」の自然法爾的態度について	雲藤義道	武蔵野女子大学紀要 三
藩学校の経営についての一考察 —岡山藩閑谷学校を中心として—	谷口澄夫	地方史研究 六一	近世における神職層と庶民信仰	米村昭二	岡山史学 二〇
近世の幼児後期の教育	村山貞雄	日本女子大学紀要(文学部) 一七			

吉田文庫「萩原兼従卿御遺言状」の一考察	平重道	ビブリア 四〇
垂加神道における秘伝の成立	〃	宮城教育大学紀要
若林強齋の神道大意・二種	谷省吾	皇学館論叢一―二
喜早清在の研究(上・下)	佐古一冽	神道史研究二六―二七
天照大神と雨宝童子 ―朝熊山の信仰を中心として―	久保田収	皇学館論叢一―三
廃仏毀釈以前における神宮寺 ―猿投神社の場合―	織田顕信	同朋学報一八・一九
「こんてむつすむん地」と仏教文学	格源一	ビブリア 三九
「おらしよの翻訳」について きりしたん版「フロスクリ」における断片文学 ―欧文印刷文学篇―二二―	柳谷武夫	〃
「日本のカテキズモ」 ―五・六―	富永牧太	〃
慶長遣欧使節の史料について ―新井トシ先生の還暦を祝して―	松田毅一	〃 三九
ルイス・ゴッダースマン神父の伝道史と長崎港の開港(原文併載)	Diego Pacheco, S.J.	〃
きりしたん版の出版とその周辺 ―七―	石原和子	〃
芸備に於けるキリシタン類族	新井トシ	〃
サビエルと新井白石	H・ケースリク	芸備地方史研究 七一
長崎県外海町黒崎地域のキリシタン・カトリックの研究	宮崎道生	日本歴史二四八
天理図書館所蔵の潜伏キリシタン資料を周って	野村暢清	哲学年報(九大) 二七
	田北耕也	ビブリア 三九

家康のいわゆる宗門提書	海老沢有道	日本歴史二四六
長宗我部元親とサン・ヘエリ ―ペ号事件― ―近世初期キリスト教禁制と航海図―	白山友正	海事史研究一一
転び伴天連の偉業 ―沢野忠庵の再評価―	伊藤俊太郎	中央公論八三―二
思想の持続性について ―天草の乱を支えたもの―	桑原安男	思想の科学八三
幕末におけるキリスト教再伝 来について	遠矢徹志	史苑 二八―二
日本におけるイソポのフアブ ラスの受容 ―ESOPHO FABULAS― ―伊曾保物語・通俗伊蘇普物語を中核としての考察―	井浦芳信	人文科学紀要(東大教養学部) 四六
イソップの絵入古版本	高橋重臣	ビブリア 三九
礼楽への帰依 ―文学史上の祖徠学・序説(上・下)―	田野龍夫	文学三六―七八
祇園南海の詩と詩論	新田大作	斯文 五一
広瀬淡窓の詩論	松下忠	和歌山大学教育学部紀要(人文科学)一七
近世文学の研究…理念と幻想 ―元禄期の觀念世界―	青木正次	国語と国文学 四五―一〇
日本近世文学圏の成立 ―俳諧初期と禅―	山本平一郎	愛知学院大学論叢(一般教育研究)一六
談林の中庸思想 ―一定家的理念の屈折点―	乾裕幸	密教文化 七九
俳諧談林園と禅 ―鬼貫俳諧における大悟道達―	山本平一郎	愛知学院大学論叢(一般教育研究)一六―二
鬼貫に於ける「まこと」の宗教的性格	山本唯一	大谷学報 四七―二

元禄俳諧精神の研究

山本唯一

大谷学報 三

芭蕉における風狂の精神

野毛孝彦

札幌大学紀要
(教養部論集) 一

芭蕉の創作意識をさぐる

山本寅雄

人文論集(神戸
商大) 三十三

芭蕉を支えた仏頂河南の禅要
—新資料に基づく文化史的綜合考察—

岡部長章

印度学仏教学研究
一七一—

芭蕉と法華經

鏗本光信

〃 一六一—二
国文学言語と文
芸 一〇—四

盤珪禪師と芭蕉
—「甲子夜話」にみられる芭蕉參禅説について—

湯沢賢之助

国文学論考 四
日本文芸研究
一九—四

芭蕉と一茶の「まかせる心」考

時下米太郎

国文学論考 四

俳論における価値概念の展開

田中俊一

専修国文 三

良寛の詩と正法眼蔵

飯田利行

女子大國文五〇

近松世話物における親子関係
(近松世話物研究—一—)

尾崎芳子

国語と国文学
四六一—

穂積以貫と近松門左衛門

佐々木久春

文芸研究(日本
文芸研究会) 五

近松浄瑠璃の方法

佐々木久春

学大國文 一一

「心中二ッ腹帯」「心中宵庚
申」の流転

横山正

論究日本文学 三

いきの発生する場
—春水人情本のいきの考察の内—

小高恭

中央大学文学部
紀要 四八

秋成の身辺整理と自己処理の
衝動

大場俊助

日本文学研究七

似雲をめぐるって
—西行享受と近世草庵人の一相—

文弥和子

文学研究
(日本文学研究
会) 二七

近世歌論の性格
—その合理性を主として—

久松潜一

文学研究
(日本文学研究
会) 二七

香川景樹の歌論の矛盾に關す
る問題

高浜充

国文学研究(梅
光女学院大) 三

本阿弥光悦小論

藤江正通

哲学(三田哲学
会) 五三

特集「幕末版画にみる情念の
造形」
—歌川国芳とその周辺—

本多良隆

みづゑ 七六四

利休の禪について

本多良隆

東海大学紀要
(文学部) 八

武道と能楽
—特に柳生家と金春家について—

大森宣昌

立正大学教養部
紀要一

塵芥集の原本について

小林宏

国学院法学部 二

戦国大名伊達氏の刑罰権
—上・下—

〃

国学院雑誌
六九—二・三

江戸時代初期における天の思
想

石毛忠

日本思想史研究 二

江戸幕府の刑政

佐々波与佐次郎

青山法学論集 二〇

封建的身分制の基礎構造
—武家の同族と主従について—

西尾陽太郎

史淵 九八

エエジャナイカ考

中村吉治

経済学(東北大)
二九—一・二

近世経世済民論の研究

高島一郎

歴史学研究 三三

近世都市論の形成

島崎隆夫

三田学会雑誌
六〇—一・二

特集・元禄町人

西川幸治

思想 五三三

白石と徂徠の貨弊論考

大久保達正

歴史教育 五—二

中井竹山の物価調整策
—近世封建中期の経済の経済学—

石沢澈

経済論集
(大東文化大) 九

大蔵永常
—埋れた幕末の近代思想—

筑波常治

史流 九
展望 一一四

江戸時代後期の生活と読書

山 県 二 雄

図書館学会年報
一五―一

玉虫左太夫
―その先見と悲劇―

玉 虫 文 一

展望 一一四

ケンペルからツェンペリーへ
―十八世紀後半の西欧世界と日本―

芳 賀 徹

紀要比較文化研
究 八

田原嗣郎著「徳川思想史研究」

衣 笠 安 喜

日本史研究 一〇二

R・N・ベラーの
「徳川期の宗教」

小笠原 真

大谷学報
四七―四

圭室諦成監修「日本仏教史」三
―「近世・近代篇」―

冠 賢 一

現代宗教研究所
所報 二

近 代

維新の精神と構想

色川大吉、竹内
好、鶴見俊輔
(座談会)

展望 一一四

明治維新をめぐる思潮

荒 川 久 寿 男

大倉山論集 九

明治期の思想と文化を語る

大内兵衛(座談会)

唯物史観 六

近代化と現代化
―日・欧・米比較文明論―

加 藤 秀 俊

中央公論 三一

近代化論争への一視点

源 了 円

自由 一〇―二

幕末における西洋文化移植の
経路(第一五回上智大学史学
大会公開講演要旨)

大久保 利 謙

上智史学 一一

肥後藩における西欧文明摂取
と対応
―明治維新への参加をめくつて―

森 田 誠 一

法文論叢 二三

日本の近代化における西洋受
容の問題

松 本 正 夫

世紀 二二―

アリストテレスと日本
―わが国における西欧的世界像の最初の受容―
伊 東 俊 太 郎
教養学科 紀要
(東大教養学部)

近世より近代への学問の展開
久 松 潜 一
文学・語学 四四

近代日本における国際語思想
の展開
藤 間 常 太 郎
関西大学社会学
論集 一一―

西洋軍事学の撰取
丸 山 国 雄
軍事史学 一二

わが国における仏語(教育)史
西 堀 昭
千葉商大論叢 九

幕末の横浜に設立された仏蘭西語学伝習所の成立とその背景
―J・C・ヘボンの人と業績―
渡 辺 実
言語生活 二〇〇

E・S・モースについて
渡 辺 正 雄
科学史研究 八四

前島密の漢字廃止建白と言文
一致活動
山 本 正 秀
言語生活 一九八

開明期啓蒙思想家の政教論
福 嶋 寛 隆
仏教史学 四―二

明六社について
本 庄 栄 治 郎
日本学士院紀要
二六―二

明六社における言論観の形成
に關する一考察
掛 川 ト ミ 子
東京大学新聞研
究所紀要 一七

幕臣福沢諭吉の「ナシヨナリ
ズム」
―文明観との関連において―
鹿 野 政 直
日本歴史 二四八

福沢諭吉における「文明」の
研究
山 県 三 千 雄
人文論集(早大
法学会) 五

福沢諭吉―改革と抵抗の精神
の所在
小 田 実
展望 一一四

わが国における西洋哲学思想の形成 飯田賢一 白山哲学 六

西周の人間性論の形成 小泉仰 日本デューイ学会紀要 七

明治思想史の一側面 安井惣二郎 密教文化 八〇

加藤弘之の転向 桐村彰郎 法学雑誌(大阪市立大) 二四―二六―一

加藤弘之と国家有機体説 河村又介 日本学士院紀要 二六―一

明治期における西洋哲学の受容と展開 一、二 峰島旭雄 早稲田商学 二〇―二〇五

日本近代思想史に及ぼせる儒学の影響 倉田信靖 東洋研究 一七

大正期の文化主義について 篠田一人 キリスト教社会問題研究 一三

大正期における唯物史観と哲学的唯物論 船山信一 立命館大学人文科学研究所紀要 一八

渡辺大濤の思想 鈴木正 季刊社会科学 四

阿部次郎の古典研究 古川久 東京女子大学附属比較文化研究所紀要 二四

阿部次郎の古典研究 古川久 東京女子大学附属比較文化研究所紀要 二五

西田哲学におけるノエマ・ノエシス概念 遠山諦虔 白山哲学 六

津田・三木とナシヨナリズム 田々宮英太郎 季刊社会科学 四

構造的意味論の先駆者・九鬼周造 国広哲弥 言語生活 二〇五

狩野亨吉 国府種武 日本文学誌要 三

戸坂潤の科学教育思想 藤井清久 群馬大学教育学部紀要(人文社会科学編) 一七

波多野精一における人格主義 泉昭雄 東京工科大学史集刊 五

和辻哲郎とマルクス主義 山田洸 西南学院大学文理論集 八一―一

「近代の超克」について 谷崎昭男 宮城教育大学紀要 二

「超克」ということばの問題 森信成 史潮 一〇二

人間学的唯物論(主体的唯物論)について 論をめぐって 船山信一教授の「人間学的実践」をめぐって 人文研究(大阪市大) 二〇―三

日本社会科学史におけるマルクス主義と近代主義 庄司興吉 思想 五二四

教科書検定問題によせて 岩井忠熊 歴史学研究 三〇

明治百年と日本の教育 保江正義 岡山史学 二二

学校行事の成立史 伊藤秀夫 教育 一八一―一四

明治期における徳教思想の系譜と性格 川瀬八洲夫 東京教育大学教育学研究集録 五

近代教育思想の特性 斎藤昭俊 印度学仏教学研究 一六一―一

明治期における仏教主義教育 斎藤昭俊 東京教育大学教育学部紀要 一四

明治歴史教授論史(付・文献目録) 宮原兔一 東京教育大学教育学部紀要 一四

わが国における仏語(教育)史 西堀 昭 千葉商大論叢九

—幕末の横浜に設立された仏蘭西語学伝習所の成立とその背景—

明治初年における欧米教育方法論の撰取に関する一考察 今野 三郎 教育学雑誌 一

明治初年の教部省・教導職の教化策の考察 小山 毅 専修人文論集 一

明治初期の教育 山口 康助 大倉山論集 九

福沢諭吉の教育目的について 岡本 仁三郎 大阪教育大学紀要(教育科学) 六

福沢諭吉の教育思想—三— 安川 寿之輔 宮城教育大学紀要 二

啓蒙家にみられる家庭教育観 伊藤 明子 日本女子大学紀要(文学部) 二七

—福沢諭吉の場合— 宮本 又久 岡山史学 二一

明治二〇年代における徳富蘇峰の教育観 森 章博 キリスト教社会問題研究 一二

明治期の帝国議会における初等教育政策 江藤 公明 帝塚山大学紀要 四

富国強兵時代の女子体育 西久 栄 東京家政学院大 学紀要 七

—女子体育観の変遷史— 明治期中学校政策に関する一考察 斎藤 太郎 東京教育大学教 育学研究集録四

—近代日本中等教育史におけるナショナルリズム論的視点の問題— 良妻賢母イデオロギーの形成 深谷 昌志 東京教育大学教 育学研究集録三

—高等女学校令を中心として— 明治末年の教育思想 菅井 鳳展 愛泉女子短大紀 要 三

—日韓併合をめぐる(上)— 歴史教科書における現代史の推移について 上野 実義 広島大学教育学 部紀要(第一部) 一六

—特に、大正時代における中等学校用日本史を中心に—

大正期における道德教育の展 小山田 勝治 東京学芸大学紀要 (教育科学) 一九

開 谷本富の宗教教育論〔付谷本 富著作一覽表〕 斎藤 昭俊 大正大学研究紀要 五二

戦前日本の教育法制理論の歴 岡本 洋三 鹿兒島大学教育学 部研究紀要(人文 科学編) 一九

史的検討—三— 昭和・戦前期教育政策史研究 埴野 謙二 高知大学学術研究 報告(人文科学) 一六

昭和・戦前期教育政策史研究 ノート—一— 埴野 謙二 高知大学教育学部 研究報告(第一部) 二〇

—フアンズム化過程における教育政策の政策決定Vの 性格—昭和初期の思想統制政策を中心として— 四— 昭和・戦前期教育政策思想研 究ノート 埴野 謙二

—問題一、教育政策思想のアクセス—政策意識について— 教学刷新評議会の成立に関する一考察 高野 邦夫 東京教育大学教 育学研究集録六

—国民教育と軍隊との関連において— 「近衛新体制」期の教育政策 二、伊集院立 松尾章一、木村靖 歴史学研究 三三

—フアンズムと変革主体討論要旨(荒 井信一・宮地正人)— 日本における信教の自由 藤谷 俊雄 政経論叢(国 学院大) 一四—四

—宗教政治史として— 日本におけるキリスト教の受 齋藤 昭 日本史研究 二〇

容と拒否 齋藤 昭 宮城学院女子大 学研究論文集三

—教育的側面からのアプローチ— 日本準管正長P・ゴメスの強 井手 勝美 史学 四〇—四

—「神学綱要」第一部第八章— 宗教受容における地域性の問 徳久 球雄 青山学院大学一 論集般教育部会 七

—群馬県下におけるキリスト教会の成立とその受容過程—

—「群馬県下におけるキリスト教会の成立とその受容過程」

—「群馬県下におけるキリスト教会の成立とその受容過程」

プロテスタンティズム受容の
一形態(初期農村教会(明治時代))

南条文雄先生
—近代仏教学研究の先駆者(人と教養)—

植村正久とその時代

雲井昭善
—大正大学研究紀要—

内村鑑三における伝統と近代
—武士道とキリスト教を中心として—

吉田久一
—親鸞教学—

内村鑑三おぼえ書き —五—

脇本平也
—自由—

内村鑑三とキリスト教文学

古田紹欽
—宗教研究—

柏木義田の内村鑑三批判

森竜吉
—宗教研究—

明治期におけるキリスト教と
社会主義

万田務
—論究日本文学—

山室軍平—「平民主義」と社
会事業(人物でつづる近代社
会事業の歩み—三—)

石川康明
—現代宗教研究所
所報—

大正デモクラシー期における
キリスト者の政治論

荒川久寿男
—皇学館論叢—

昭和一六年におけるキリスト
教運動 —二—
—内務省警保局「社会運動の状況」による(資料)—

藤井貞文
—神道学—

深井英五について
—その信仰と思想—

鎌田純一
—大倉山論集—

手塚縫藏に関する断章
—キリスト教の日本の変容—

阿部吉夫
—経済論集(北海
学園大)—

明治における在家仏教運動の
性格

金子圭助
—天理大学学報
(人文社会科学
篇)—

近代における仏教の社会的開
眼とマルクス主義

吉田久一
—歴史教育—

日本の近代化と真宗 —上—

加藤章一
—宗教教学年報—

—ウェーバー的視角と問題意識の設定に関連して—

米地実
—法学研究(慶大)—

人文学報(都立
大) 六六

比較文化 一四

明治大学教養論
集 四五

人文研究(神奈
川大) 四〇

京都府立大学学
術報告 一九

キリスト教社会
問題研究 一三

基督教研究三五

月刊福祉
五一—三

キリスト教社会
問題研究 一三

キリスト教社会
問題研究 一二

キリスト教社会
問題研究 一二

明治大学教養論
集 三四

印度学仏教学研
究 一六—二

浄土宗学研究二

竜谷大学経済学
論集 七—四

仏教学セミナー七

大正大学研究紀
要 五二

自由一〇—一〇

宗教研究四—二

論究日本文学三

現代宗教研究所
所報 二

皇学館論叢
一一—二

神道学 五七

大倉山論集 九

経済論集(北海
学園大) 一九

天理大学学報
(人文社会科学
篇) 一九—二

歴史教育
一六—一、二

宗教教学年報一七

宗教学年報一七

法学研究(慶大)
四—一九

日本の近代化と文学の問題 清水 茂

日本文学(日本文学協会)二七―四

明治文学の主題語

―「人情」と「情熱」

橋 浦 兵 一

宮城教育大学紀要二

近代日本文学と近代人の登場

吉 田 精 一

国文学解釈と鑑賞 三三―三五

国権的政治小説とその位相

和 田 繁 二 郎

立命館大学人文科学研究所紀要 一八

連帯から孤独へ

―近代的自我の思想と文学発想―

森 川 達 也

日本文学(日本文学協会)二七―四

明治文学に於ける仏教の受容性

藤 井 智 海

同朋学報六・二

日本の社会主義文学運動とその国際交流関係

―比較文学的見地からの一考察―

山 口 忠 幸

中央大学文学部紀要 五〇

福地桜痴小論

坪内逍遙とディケンズ

―写真と滑稽に関連して―

寺 谷 昌 隆

国文学論叢一四

国木田独歩覚え書

―テニソン・キリスト教との関連において―

小 玉 晃 一

青山学院大学一般教育会論集七

国木田独歩と民友社

―政治の問題―

辻 橋 三 郎

キリスト教社会問題研究 一二

「国民之友」の和歌論

露伴における立身出世主義

―「力作型」の人間像―

中 皓

キリスト教社会問題研究 一二

「内部生命論」における世界像の変質

―透谷試論―

前 田 愛

国語と国文学 四五―四

北村透谷と徳富蘇峰

―その文明批評の連関性について―

野 山 嘉 正

国語と国文学 四五―八・九

透谷とキリスト教

―評論とキリスト教に関する一試論―

横 林 滉 二

日本近代文学六

佐 藤 泰 正

日本近代文学七

透谷の文学像

透谷と蒼海

―「大矢正夫自叙伝」の発見によせて―

平 岡 敏 夫

文学 三六―三

北村透谷像について

―平岡・色川・桶谷氏の問題提起を中心に―

小 沢 勝 美

日本文学(日本文学協会) 一七―九

透谷像について

―小沢氏の「整理」(「小沢勝美「北村透谷像について」(本誌九月号掲載)に反論する

平 岡 敏 夫

日本文学 七―二

正宗白鳥とキリスト教

―乗教について―

佐 々 木 雅 発

国文学研究(早大) 三八

正岡子規「写生」理論の構造

―「天然」と「人事」を中心として―

今 西 幹 一

日本文芸研究 一九―三

正岡子規研究序説

―写生説成立の精神的基盤―

齋 藤 正 二

二松学舎大学論集昭和四二年度

正 岡 子 規

―その精神の座標軸―

川 崎 展 宏

国語と国文学 四

他力思想と近代文学

―左平夫・甲之・磯多―

大 河 内 昭 爾

日本近代文学七

漱石の「文学論」と「文芸の哲学的基礎」

―人生と文芸との関係―

高 橋 美 智 子

文芸研究(日本文芸研究会) 五

「則天去私」論

漱石の心的世界―一三―

―漱石作品の精神分析的解釈―一三完―

波 多 野 鹿 之 助

文化学年報一七

漱石の「英国詩人の天地山川に対する観念」の意味

―漱石の「英国詩人の天地山川に対する観念」の意味

土 居 健 郎

国文学解釈と鑑賞 三三―一五

漱石の経済学

―則天去私と明暗―

中 原 章 雄

立命館大学人文科学研究所紀要 一八

漱石晩年の思想―一・三・三完―

―則天去私と明暗―

星 野 周 一 郎

帝塚山学院大学研究論集 二

漱石三部作の社会学理論的考察

―個人と社会の弁証法―

武 田 宗 俊

心 二二―一五・六

漱石三部作の社会学理論的考察

―個人と社会の弁証法―

齋 藤 悟 郎

法経論集(新潟大学) 一七―三〇

森鷗外の諦念―一・二・三・四―岡崎義恵

鷗外の時代批判について―「青年」を中心とした思想的考察―荒川久寿男

鷗外の「青年」における思想と芸術北川伊男

明治初期の文芸論と儒教思想北川伊男

―鷗外のヘルトマン美学の受用をめぐって―

森鷗外と「和魂洋才」平川祐弘

―周辺文化の国における文化受容の心理について―

森鷗外における西洋と東洋の出会い増田史郎亮

―主として彼の教育思想について―

鷗外と貴族的急進主義者としてのニーチェ三島憲一

逍遙・鷗外の「没理想論争」における文芸理論山内祥史

―その研究序説として、文献について―

「見神の実験」をめぐって川合道雄

啄木論国崎望久太郎

―その近代の意味―

石川啄木と国禁の書川並秀雄

文学における「家」の社会的考察川本彰

―光太郎・荷風・鷗外の場合―

日本文壇史―一七七―一八八伊藤整

徳富芦花の宗教観神田重幸

―トルストイとの交渉において―

蘆花徳富健次郎―一四中野好夫

芦花探訪拾遺―一―中野好夫

芥川竜之介とキリスト教鈴木秀子

―「西方の人」を中心として―

トルストイ体験と「新しき村」―「新しき村」と武者小路実篤―大津山国夫

有島農場開放の問題点―上・下―武井静夫

宮沢賢治における「天」の意識恩田逸夫

労働文学の系譜森本修

―新井紅一・内藤辰雄・吉田金重をめぐって―

近代日本における書論の展開有田光甫

―書論一〇〇年のあゆみ―

日本の芸術論におけるレアリズムの萌芽手塚唯聴

明治における西洋と日本の問題江口正一

―近代日本美術の思想的背景―

明治の洋画にみる浪漫思潮原田実

―白馬会・藤島武二・青木繁にふれて―

岡倉天心高階秀爾

―日本近代美術史ノート―一六―

岡倉天心の書簡―一・二・三完―匠秀夫

―高橋太華宛未発表書を簡めぐって―

荻原守衛の人物と芸術について小松茂美

―第三章・荻原守衛の思想―一三―伊藤鈞

荻原禄山を中心とした日本の彫刻野水信

明治初期における音楽教育の展望馬場健

―伊沢修二と音楽取調掛を中心に―

明治の文芸雑誌―一八―杉本邦子

―「女学雑誌」・「女学叢誌」―

静岡女子大学研究紀要

国文学(学燈社) 一三一―一〇・二四

武蔵野女子大学紀要 三

立命館大学人文科学研究所紀要 一八

墨美 一八二

相愛女子大学・相愛女子短期大学研究論集 一五

Museum 204

Museum 204

季刊芸術 二―三

三彩 三三・三三三・三三五

Museum 202

山口大学教育学部研究論叢 一七(第三部)

同朋学報 一八・一九

哲学(三田哲学会) 五三

学苑 三四五

明治後期における地方言論人の後割
—大石誠之助とその周辺—

山口 功二

新聞学評論一七

昭和言論弾圧史 —5・6・7
8・9・10

黒田 秀俊

総合ジャーナリズム研究五—三三
四・五・六・七 六一—
社会科学討究 一四—

陸軍省パンフレットと国体明徴運動
—言論界にみるその反響—

石 関 敬三

社会科学討究 一四—

明治国家の国是をめぐる問題

永井 秀夫

北海道大学文学部紀要一六一—

明治イデオロギーの正統と異端

大江 志乃夫

現代の眼九—二

「近代」批判の成立
—民衆思想における—

鹿野 政直

歴史学研究 三三

近代化過程における民衆道徳とイデオロギー編成

安 丸 良夫

歴史学研究 三三

近代天皇制研究序説 —1—

下山 三郎

東京経大会誌 五七

天皇制イデオロギーと民衆意識序説

色 川 大吉

歴史学研究 三三

天皇制イデオロギーと民衆意識
—哲学館事件について—

色 川 大吉

歴史学研究 三三

天皇制と倫理問題
—哲学館事件について—

宮 本 又久

岡山史学 二二

近代天皇制についての試論
—野呂栄太郎の「第一論文」によせて—

久 世 了

経済論集(明治学院大) 一〇

日本ナショナリズム思想の原型
—天皇制歴史観の成立をめぐる—

岩 井 忠熊

立命館大学人文科学研究所紀要 一八

天皇制と明治ナショナリズム
—近代国家成立期における一考察—

葦 津 珍彦

季刊社会科学 四

天皇制国家の統治原理

河 原 宏

社会科学討究 一三一—二

幕末維新期における名望家層と庶民意識
—とくに古橋暉見を中心として—

芳 賀 登

歴史教育 一六一—二

幕末維新の変革と豪農の天皇信仰
—とくに豪農の天明・天保維新体験を関連させて—

芳 賀 登

歴史学研究 三四—

幕末土佐藩の「庄屋同盟」と明治初期の「立志社」および「古勤王党」
—「地方史研究協議会」高知大会の「共通課題」に関連して—

入 交 好脩

地方史研究 一八—

幕末・維新期における外庄の作用と天皇制 —1・2—

佐々木 一郎

岡山大学法経学会雑誌 一七三—一八—

佐々木高行日記 —前—
天保から慶応三年まで
—「尊攘派土士の足跡(資料紹介)」—

色 川 大吉

東京経大会誌 五七

維新期の農民闘争とその思想

有 元 正雄

日本史研究 一〇〇

明治国家の課題

下 村 富士男

歴史教育 六一—三

明治維新の革命性
—尊王攘夷思想はどう革命の原動力たり得たか—

上 山 春平

展望 一一四

明治維新と国家護持の精神

小 川 常人

神道史研究 一五

明治政権の指導理念とその展開
—大久保利通を中心として—

中 村 尚美

社会科学討究 一三一—二

明治前期の政治思想について
—小田為綱の思想を中心として—

森 嘉兵衛

岩手大学教育学部研究年報 二七

富国強兵と実学の系譜

安藤 良雄・井上 清

現代の眼九—二

自由民権時代の思想

西 野 辰吉

文化評論 八六

近代日本形成期における政治路線
—自由民権運動における分裂抗争—

田 村 貞雄

唯物史観 六

植 木 枝 盛
—透徹した個人の観念—

松 本 三之介

展望 一一四

中江兆民の国家構想
—自由民権期におけるナショナリズムの諸問題—

松 永 昌三

季刊社会科学 四

小野梓と共存同衆

デビス、サン
ドラ・T・W

早稲田大学史紀
要 二―二

「女学」思想の形成と転回
―女学雑誌社の思想史的研究―

井上輝子

東京大学新聞研
究所紀要 一七

思想集団としての民友社

荒瀬豊

東京大学新聞研
究所紀要 一七

徳富蘇峰の生涯と政治思想

田畑忍

キリスト教社会
問題研究 一二

徳富蘇峰の「思想の進化」に
ついて
―時務一家言―を通して―

原口宗久

神道学 五八

蘇峰先生を語る

秦孝治郎 他

墨美 一七六

「政教社」における組織とイ
デオロギ―
―ナショナルリズムの思想構造―

塚本三夫

東京大学新聞研
究所紀要 一七

山路愛山の国家社会主義史観

今中寛司

キリスト教社会
問題研究 一二

山路愛山における帝国主義観

藤井松一

立命館大学人文
科学研究所紀要 一八

山路愛山の国家社会主義
―2―
―明治ナショナルリズムの一断面―

木村時夫

早稲田大学自然
科学研究二・三

帝国主義成立期における浮田
和民の思想的特質

栄沢幸一

歴史学研究
三三二

田岡嶺雲の思想

瀬尾幹夫

文芸研究(日本
文芸研究会) 癸

明治反権力思想家の思想構造
―田岡嶺雲小論―

山田真津夫

東京経大学会誌
五七

木下尚江にみられる天皇制否
定の論理

山田光二

立命館文学
二七五

木下尚江の「退隱」について
の考察
―小説「墓場」の成立から―

後神俊文

岡山史学 二一

木下尚江
―その発想と回心について―

藤田美実

明治大学論集盟

明治社会主義意識の形成

中村勝範

法学研究(慶大)
四一―七

明治社会主義の帰結
―「直接行動論」をめぐって―

飛鳥井雅道

思想 五二四

アナ・ボル論争
(アナ・キズムか、ボルンエビズムか―大正期の社会主義運動―)

犬丸義一

エコノミスト 四一七

明治社会主義の思想
―幸徳秋水を中心にして―

塩田庄兵衛

文化評論 八六

堺利彦ノート
―万朝報時代を中心に―

林尚男

日本文学 七―三

日本の社会主義思想における
反戦について
―第一次大戦とシベリア出兵をめぐって―

神田文人

歴史学研究
三三八

日本フェビアン協会の思想
―社会民主主義思想の前駆―

小山仁示

史泉三五・三六

明治後半期における藩閥政府
と政党
―原敬の価値観について―

横溝軌一

西南学院大学経
済学論集 二―一

田中正造
―その人民國家の構想―

鹿野政直

展望 一一四

滔天と清国革命はどうして結
びついたか

衛藤藩吉

思想 五二五

「樽井藤吉」論の系譜―二―

松田博

朝鮮研究 七九

日韓併合後の内田良平

西尾陽太郎

史淵 一〇〇

杉山茂丸小論
大正期における民主主義と外
交意識について

山岡桂二

日本歴史二三八
大阪教育大学紀
要(社会科学・
生活科学) 一六

政治思想

(民本主義か、官僚専制か—大正デモクラシーの理論) (近代日本の争点—八五—)

大正期におけるデモクラシー 太田雅夫

大正政変と民本主義 宮本又久

「新人会(前期)」の活動と思想 佐々木敏二

大正テロリストの思想 森山重雄

日本帝国主義の朝鮮における思想運動について 欄木寿男

大正期における朝鮮問題論 奥田修三

吉野作造と朝鮮 松尾尊兌

三一運動と日本プロテスタント 〃

昭和維新の思想と行動 松沢哲成

天皇機関説事件 九〇二二 宮沢俊義

危機における日本帝国主義の思想 尾川昌法

日本の近代化と憲法学の欠陥 針生誠吉

幕末期の近代憲法思想(「憲法における比較法」序説) 高木武

明治維新期における法制官僚の思考過程 高橋康昌

—井上毅の場合—

エコノミスト 九

キリスト教社会問題研究 一三

岡山大学法文学部学術紀要二八

キリスト教社会問題研究 一三

日本文学二一三

朝鮮研究 七九

立命館大学人文科学研究所紀要 一八

人文学報(京大) 二五

思想 五三三

社会科学研究 一九一三

ジュリスト 三九四〇七

日本史研究九七

比較法学四一二

比較法 六

法学新報 七四一一・一二

穂積陳重の法理学

井上密博士の憲法學說

北海道開拓民衆精神史研究序説 一一

日本近代化と豪農思想 一杉田仙十郎・定一について

横井時敬と福岡農学校

明治十年代の農村と自力更生運動 一愛知県北設楽郡を中心に—上—

大正デモクラシー期の農民運動

日本における婦人解放運動とその思想 一プロレタリア婦人運動前史—

大正期ブルジョア婦人運動と婦人教師 一新婦人協会広島支部の設置をめぐる—

安部磯雄の婦人論

明治期の報徳社運動の史的社会的背景 一二完

横山源之助 一社会事業対象と「日本の下層社会」(人物でつづる近代社会事業の歩み—四—)

明治期における鴻池家の機構改革と鴻池家憲法

「スミスとリスト」から「マルクスとヴェーバー」へ 一特殊・日本「市民社会」思想研究への分析視点によせて—

松尾敬一

鈴木安藏

ひろたまさき

宮城公子

飯沼二郎

大浜徹也

高橋宗司

嶋津千利世

今中保子

坂本武人

江守五夫

吉田久一

宮本又次

住谷一彦

神戸法学雑誌 一七—三

立正法学 一一二

史流 九

日本史研究九五

農林業問題研究 四—三

日本歴史二四六

史潮 一〇三

思想 五二六

歴史評論二一七

キリスト教社会問題研究 一三

法律論叢 四〇—二・三

月刊福祉 五—四

同志社商法 二〇—一・二

思想 五三二

歴史における人間像の諸問題 黒田 紘一郎
文化史研究二〇
「いわゆる『昭和史論争』と『帝國主義的歴史観』のイデオロギーをめぐって」

佐藤直助著「西洋文化受容の史的的研究」 渡部 昇一
ソフィア 一七—二

思想の科学研究会編「共同研究明治維新」 中村 尚美
社会科学討究 一三一—三

M・B・ジャンセン編細谷干博編訳「日本における近代化の問題」 解良 誠治
アナリスト 一四—一

笠井清著「南方熊楠」 益田 勝実
文学 三六—三

鈴木正著「近代日本の理性」市井三郎著「明治維新」の哲学」 塚谷 晃弘
国学院経済学 一六—三

戸坂潤と現代日本
「日本イデオロギー論」をめぐって」 荒瀬 豊
世界 二七—六

中村哲著「柳田国男の思想」 橋川 文三
文学 三六—八

青地農「天理教—百三十年目の信仰革命」 井門 富士夫
世界 二七—六

「明治維新 神道百年史」(全五卷) 加藤 隆久
神道史研究 一六—四

平岡敏夫著「北村透谷研究」 飛鳥井 雅道
日本近代文学六

平岡敏夫著「北村透谷研究」 安住 誠悦
国文学言語と文芸 一〇—一

宮川寅雄著「近代美術とその思想」—岡倉天心の大雅論を中心に— 佐々木 静一
和光大学人文学部紀要 一

海後宗臣編「井上毅の教育政策」 窪田 祥宏
教育学雑誌 二

中村雄二郎著「近代日本における制度と思想」 鹿野 政直
社会科学討究 一三—三

美濃部達吉に関する最近の研究 中村 哲
法学志林 六五—四

家永三郎著「美濃部達吉の思想的的研究」
F. O. Miller: Minobe Tatsukichi-Interpreter of Constitutionalism in Japan, 1965

佐々木惣一博士の中等学校法教科書 宮田 豊
法学論叢(京大) 八二—五

金原左門著「大正デモクラシーの社会的形成」 西田 美昭
歴史学研究 三三八

今井清一「大正デモクラシー(日本の歴史二三)」 伊藤 康子
歴史評論二一七

絲屋寿雄著「幸徳秋水」 小松 隆二
三田学会雑誌 六一—二

絲屋寿雄著「幸徳秋水研究」の書評によせて 大原 慧
歴史学研究 三二—二

発刊の辞

東北大学法文学部の開設とともに、故村岡典嗣氏を初代の主任教授として日本思想史学専攻が設立せられたのは大正十二年のことである。

昭和二十一年春、村岡氏が定年退官せられて後、後任者の得難きままに九年余を経て、昭和三十年に故竹岡勝也氏が就任せられた。しかし竹岡氏も在職二年にして定年退官せられ、一年を経て昭和三十三年に私が両教授の芳燭をけがすことになった。

本専攻の学部(第三・四年)は「日本思想史学専攻」として文学部史学科に属し、大学院(修士・博士課程)は「国文学国語学日本思想史学専攻」として文学研究科に属している。日本思想史学の独立の講座を基礎として、日本史(国史)専攻、乃至は国文学専攻または倫理学専攻とは別に、独立した「日本思想史学専攻」が設けられているのは、東北大学のみである。

以上の如き本専攻の歴史と現状に鑑み、関係者相い諮って、専攻専属の機関誌として、本誌を刊行し、その研究・教育の状況を学の内外に紹介することにした。大方の御援助を仰ぐ次第である。

昭和四十二年三月

石 田 一 良

日本思想史研究 第四号

昭和四十五年八月十八日 印刷

昭和四十五年八月三十一日 発行

編集代表者 石 田 一 良

仙台市清水小路六

印刷所 丹野印刷株式会社

仙台市片平丁

発行所 東北大学文学部

日本思想史学研究室